ISSN 2189-7476

森のちゃれんがニュース 2025 秋

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.41

第11回特別展「新選組永倉新八と会津藩士栗田鉄馬 ― 二人のサムライが歩んだ幕末・近代 ―」開催 （2025年7月19日～9月15日）

本展では、約400件の貴重な歴史資料等を展示し、二人の生涯をたどりながら、彼らが生きた激動の時代について紹介しました。

第１章「幕末の京都にて」では、日本国中が「開国」か「攘夷」かで揺れるなか、互いに所属は違えども、政局の中心となった京都で、治安維持に奔走した様子を探りました。

第２章「戊辰戦争」では、慶応４年（1868）１月３日に京都南部の鳥羽・伏見で始まった旧幕府軍と新政府軍の戦いから、二人が「敗者」となるまでの苛烈な足跡をたどりました。

第３章「それぞれの近代」では、舞台が明治・大正期の北海道に移ります。鉄馬は「会津降伏人」の一員として、新八は松前藩医杉村家の婿養子となって、北海道へやってきました。その後、鉄馬は剣術家として、絵師として。新八は剣術師範として、新選組の生き証人として生きました。

エピローグには、本展を開催するきっかけとなった１枚の写真を展示しました。大正２年（1913）５月に札幌の写真館で撮影されたもので、二人は数え年で75歳。剣術仲間とともに写る風貌は、最後まで剣の道に生きた“サムライ”であったことを感じさせてくれました。　（学芸主査　圓谷昂史）

CONTENTS

2 収蔵資料紹介 「山田秀三文庫」のさまざまな貌（かお）
3 総合展示資料紹介・第3テーマ みがきにしんをそのままで食べること
4 研究活動紹介 伝承者と調査者の狭間で －津軽海峡、寒中みそぎの民俗誌－
6 解説案内スタッフレポート おすすめスポット－展望テラス
トピックス 第4テーマ、一部改修しました
7 アイヌ民族文化研究センターだより 講演会「アイヌ民族を撮影した最古級の映像とその被写体」実施報告
8 活動ダイアリー 2025年6月～2025年8月の記録

収蔵資料紹介

「山田秀三文庫」のさまざまな貌

小川正人
アイヌ民族文化研究センター　研究主査

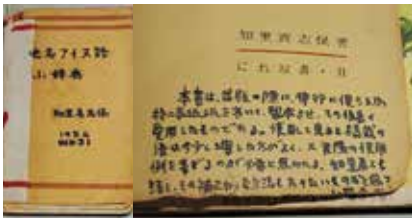
山田秀三文庫とは

北海道博物館が収蔵する「山田秀三文庫」は、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三（1899～1992）の旧蔵資料です。

資料の中心は言うまでもなくアイヌ語に由来するとされる地名に関する調査記録で、近世の古地図から近現代の地形図までのさまざまな地図、現地調査の際に撮影した各地の写真、北海道・東北各地での調査の記録をまとめたノートなどがあります。

小樽での地名調査記録の一部

山田秀三はまた、八重九郎（1895～1978）、知里真志保（1909～1961）、萱野茂（1926～2006）らの、アイヌ語・アイヌ文化の伝承者や研究者として知られる人々と交友を持ち、北海道文化財保護協会（1961年設立）やアイヌ文化伝承保存会（のちアイヌ無形文化伝承保存会、1974年設立）などの設立・運営の中心を担った一人でもあり、こうした人々や組織との関わりを物語る記録も多く含まれています。



知里真志保から贈られた『地名アイヌ語小辞典』：表紙（山田秀三によるカバー）と、とびらの書き込み

さまざまな貌・特色を持つ資料群

山田秀三文庫のもう一つの特色として、1945年までを商工省などの官僚として生き、その後、乞われて北海道曹達株式会社の経営に当たり、そのかたわら地名調査に没頭してきた……という山田秀三の経歴や、古代史や民俗文化などへの関心を反映して、戦前期の産業政策に関する資料や北海道曹達の草創期に関する資料、鹿島神宮、上賀茂神社、伊勢神宮などを訪れた記録、山の辺の道を歩いた記録などさまざまな内容の資料が多く含まれることが挙げられます。

今回は、そのいくつかの例をご紹介します。

関東地方の地名を調査した記録

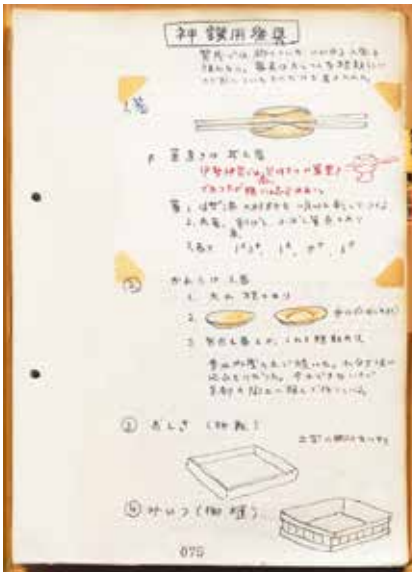
山田秀三の著作の一つに、『関東地名物語―谷・谷戸・谷津・谷地の研究―』（草風館、1990年）という本があります。そこには、アイヌ語に由来する地名とは別に、東京周辺の地名、特に「渋谷」「四谷」などの「ヤ」や「ヤツ」「ヤチ」「ヤト」の付く地名に関心を持ち、自ら文献を調べつつ現地調査を重ねた成果がまとめられています。

山田秀三文庫には、東京都、神奈川県、埼玉県、群馬県などで現地調査も行った記録などをまとめたファイルなどが残されています。

東京都多摩地域・秋川筋の「ヤト」「ヤチ」などの地名を調査した記録の一部

各地の神社などを訪れた記録

いくつかの神宮、神社を訪れたときの記録が、地名調査の記録と同じようなかたちでまとめられているファイルも見られます。



京都・上賀茂神社を訪れた記録の一部

戦時下の産業政策に関する資料

山田秀三は、戦時下の日本の産業政策や資源政策にも携わりました。山田秀三文庫には、量としてはさほど多くはないものの、当時の会議資料や刊行物が含まれています。

官僚時代の資料の一部

これらの、山田秀三文庫のさまざまな分野の資料は、当館が総合博物館であることを活かして、より多様な利活用を図ることができるのではと考えており、引き続き整理につとめていきたいと思っています。

総合展示資料紹介・第3テーマ

みがきにしんをそのままで食べること

波 田 尚 大
北海道研究センター（人文系） 学芸員

写真１　大正５年(1916)の北海道「主要物産番附」とニシン

総合展示第３テーマ「北海道らしさの秘密」のコーナーに、矢谷重芳が編集した『北海道百番附』の内、大正５年(1916)の「主要物産番附」を展示しています(写真１)。同番附によると、「鰊(にしん)」、「鰊鰮(にしんかずのこ)」、「鰊油」、「鰊搾粕(にしんしぼりかす)」、「身缺鰊(みがきにしん)」など、ニシンとその加工品が多数ランクインしており、当時の北海道における漁業生産額の50%前後をニシンが占めていました。そんなニシンの加工品である、みがきにしんをそのままで食べることについて紹介します。

みがきにしんは、素干しし、脊肉部を切り取ったニシンのことです(大島1981)。干すことで長期間の保存が可能になり、熟成されて味や香りもよくなります。一般的にはこれを水戻しして、煮物やにしん漬けなどにします。

一方、北海道の一部地域、たとえば岩内町や利尻町・利尻富士町などのニシン漁で栄えた地域では、皮を剥き、そのまま食べることがあります。昭和33年(1958)に岩内町で生まれた私の母から教わった、みがきにしんをそのままで食べる方法は以下のとおりです。

1　ソフト・八分乾ではなく、本乾のみがきにしんを用意します(写真２)
2　手で皮を剥きます
3　身をはさみ等で食べやすい大きさ(1.5-2.0cm)にカットします
4　カットした身を味噌と和えて完成です(写真３)

このまま食べても美味しいのですが、味噌を和えた後に時間を置くと、若干身が柔らかくなり食べやすくなります。骨が多いため、食べる際には注意が必要です。また、本乾と言っても、乾燥しきって固くなり過ぎたものは避けたと言います。昭和８年(1933)生まれの岩内町出身の私の祖母によると、皮を剥き、むしって、味噌等をつけずに、おつまみ感覚で食べていたそうです。同様に、青森県津軽地方の農村部でもみがきにしんに味噌をつけ、酒の肴として食べていたことが報告されています(高橋 1986)。

道内から全国に流通し、様々な食文化を育んだみがきにしんをそのままで食べることは、生産地の北海道に伝わる、野趣あふれる食文化の一つと言えます。

<引用文献>
・大島浩　1981「身欠きニシン」北海道新聞社編『北海道大百科事典』下巻
・高橋みちよ　1986「津軽の食」「日本の食生活全集　青森」編集委員会編　日本の食生活全集②『聞き書 青森の食事』農山漁村文化協会

写真３　皮を剥き、はさみでカットし、味噌で和えたみがきにしん

写真２　本乾のみがきにしん

研究活動紹介

伝承者と調査者の狭間で
ー津軽海峡、寒中みそぎの民俗誌ー

谷 口 生貴斗
北海道研究センター（人文系） 学芸員

2001年生まれ。福岡県糸島市出身。2024年から当館学芸員。専門は日本民俗学。写真は、渡島管内木古内町の佐女川神社にて（2025年１月13日右代啓視氏撮影）。

あるネット記事から

昨年（2024）11月29日のことです。偶然目にしたのは「江戸時代から続く伝統が存続の危機」と題したインターネットの記事。読んでみれば北海道の内容ではありませんか。そこで「伝統を受け継ぐ若者の出現に期待」の文字を見た私は、1時間後には書かれた番号に電話をかけていました。

「水を浴び続ける行事です。大丈夫ですか。―経験ありませんが頑張ります。」「海に入って泳ぎます。大丈夫ですか。―陸上部でした。体力だけには自信があります。」「4年間結婚できませんが本当に大丈夫ですか。―はい。今のところまったく問題ありません。」。

こうして「出現」した若者の姿は、1月12日、道南の木古内（きこない）町にありました。翌日から始まる神事に備え、初めて木古内の地を踏んだこの時まで、私にはまだ見たことのない「伝統を受け継ぐ」ことへの期待しかなかったのです。

民俗学を志して北海道へ

九州の山村で育った私。家の敷地には祠（ほこら）や石塔を祀（まつ）り、隣接した神社では年間十数回の神事がありました。この日常が、都会に住む友人たちと少し違ったものだと気づいたのは中学生の頃でした。友人たちと少し違う、私の生活の当たり前。この「もやもや」を解決するための学問が、私にとって民俗学だったのです。

大学で民俗学を専攻する中、「儀礼・信仰・年中行事」という職員募集に惹かれて北海道に移り住んだのは昨年4月のことでした。馴染みのない地で、いかに調査研究を進めていくべきか、しばらく苦悩の日々が続きました。

そんな時に出会ったのが冒頭の記事でした。厳寒の津軽海峡の奇祭として多くのメディアで報道される佐女川（さめがわ）神社寒中みそぎは、道内で高い知名度を誇ります。しかし私は、記事で初めてその存在を知ったのでした。

佐女川神社寒中みそぎとは

佐女川神社は、北海道でも長い歴史を持つ神社の1つです。今から400年前の寛永2年（1625）に建てられた祠が神社の起源とされています。

佐女川神社の神事である寒中みそぎは天保2年（1831）から続くとされ、木古内の人びとに長く伝承されてきました。1月13日から15日まで、4人の若者からなる行修者（ぎょうしゅうしゃ）が社殿に籠もりながら、冷水をかぶる鍛錬（水垢離（みずごり））を繰り返し行います。15日には津軽海峡でご神体を清め、1年の豊漁・豊作を祈願します。一昨年には道の無形民俗文化財に指定されました。

行修者は、未婚の男子が4年間務めます。1年目が弁財天、2年目が山の神、3年目が稲荷、4年目が別当と呼ばれ、ご神体を1体ずつ担当します。別当の持つご神体は、主祭神である玉依姫命（たまよりひめのみこと）です。参籠（さんろう）の間、行修者にはいくつかの禁忌が課せられます。互いを本名で呼ばない（役の名で呼ぶ）、四つ足の動物は食べない（鶏肉は許される）、「し」「す」の語を発さない（「じ」「ず」と発音する）、女性を社殿にあげない、といったものです。食事と3時間のみ許される睡眠を除けば、ほぼ1時間ごとに水垢離を繰り返します。

かつて行修者は町内の若者に限られ、地元の中高生がその多くを担ってきました。成り手不足から、初めて町外へ公募が行われたのは昨年の夏でした。しかし11月に入っても応募者はゼロ、まさに「存続の危機」に瀕していたのです。

寒中みそぎ・弁財天の民俗誌

こうして行修者になった私は、1月12日に初めて他の行修者と顔合わせをしました。山の神と稲荷は17歳、別当は26歳。23歳での弁財天は、比較的遅いスタートです。

13日朝、行修者は町内の床屋へ向かいます。ここで私は人生初の坊主姿となりました。水が髪に残ると凍るから頭を刈り込むのだ、別当からそう聞いて急に不安が襲ってきました。

18時から社殿で参籠報告祭。祝詞（のりと）奏上が終わると、すぐに「オマニシクギダ（大澗の浜に鰊の群来（くき）だ）」の太鼓が鳴り響きます。さあ最初の水垢離です。褌（ふんどし）姿の行修者は社殿横の石段を一列で下ります。水垢離用の舞台まで進むと、掛け声をあげて、別当から桶で冷水をかぶっていくのです。弁財天まで順に7の倍数で水をかぶり、2、3度ずつ繰り返すと、また社殿前まで石段を上っていきます。この時社殿の扉が閉まっていれば、再び背を向けて水垢離に戻るのです。同様の水垢離を、少なくとも2周、多いときには5～7周も繰り返します。ようやく社殿に戻ることが許されると、濡れた身体のまま神前に拝礼します。ここまでが1回の水垢離です。

1時間ほど経つと再び太鼓が鳴り響きます。そして、深夜2時まで水垢離を繰り返すのです。また社殿にいる間も横になることは許されず、仕事が課せられます。囲炉裏の火を絶やさないよう炭(ずみ)をくべること、参拝者の接待を行うことです。

外は氷点下、日付が変わる頃になると、より一層身に堪えました。水垢離中、行修者は身体の震えを止めなければなりません。気を緩めれば、すぐにOBたちから檄(げき)が飛んできます。この日はほとんど震えを止められず、食事も喉を通りませんでした。深夜2時、社殿内の布団で倒れるように眠りにつきました。

14日朝5時、太鼓の音で目が覚めます。間を置かず水垢離へと向かいます。この日は翌2時まで21時間水をかぶり続けなければなりません。水垢離を重ねても身体は震え続け、見かねた別当やOBから指導が入ります。社殿へ戻り囲炉裏で暖をとっても止まらない震えに、このままでは死ぬという感覚を覚えました。体温を上げるため、鶏肉や魚介を意識的に口にします。行修者が水垢離と間食とを繰り返す中、その姿を見ようと境内には多くの観客が集まってきました。花火も上がり、賑やかな声が聞こえてきます。しかし、行修者には関係ありません。石段を何度も往復し水垢離を重ねるなか、意識が遠のくのを必死に抑え、ただひたすらに耐え続けました。いま振り返っても、深夜2時に床につくまでの記憶は曖昧です。

15日朝5時、ついに3日目を迎えました。この日も朝から水垢離を繰り返し、10時に出御祭(しゅつぎょさい)を迎えます。祝詞の後、白装束の行修者はご神体を手に、神職や役員に先導されながら列になって浜まで進みます。津軽海峡に面したみそぎ浜までは約1.5km、辺り一面は銀世界です。鮮やかな装束をまとった神職たちの笛や太鼓の音が、深い雪の中に響きます。浜へと進む長い列に向かって、手を合わせる人の姿も時折見られます。弁財天の重みを胸に感じつつ、吹雪の参道に連なる列の美しさに私も思わず息をのみました。

左から、弁財天、山の神、稲荷、別当（1月15日みそぎ浜にて右代啓視氏撮影）。

浜では既に大勢の観客が見守っています。再び褌姿になった行修者は、掛け声とともに一斉に海へ走りこみました。水をかく両腕の間にご神体を浮かべながら、沖へ沖へと横一列に泳ぎます。吐錠(とじょう)を咥えた口の隙間からは海水が入ってきます。こらえながら進んでいくと、別当の合図が聞こえました。浜へと戻ります。これを2度繰り返すと、行修者は波打ち際で向かい合い、4体のご神体を中央に置いて海水をかけて清めます。海から上がったときには、震えもほとんど止まっていました。この日の海水温は6℃。しかし、確かに津軽海峡は暖かく感じられたのです。

観客が取り囲んだ浜の舞台で水垢離を行った後、再び列になって神社へと戻ります。ようやく最後の水垢離です。この時だけはご神体を横に置き、行修者はご神体とともに身を清めます。

そして本祭です。観客の老若男女はみな社殿に上がり、奉納される松前神楽を行修者とともに楽しむのです。これで3日間にわたる日程が終わりました。達成感よりも安堵の気持ちでいっぱいでした。

伝承者と調査者の狭間に立って

我が身をもって「伝承者になる」経験から浮かび上がったのは、外側からの調査では見えないものの数々でした。詳細な伝承の内容を記録できたこと以上に、強烈な経験の中で抱いた自身の感情の揺らぎこそが、成果なのだと考えています。自身の感情に向き合うことが、伝承する人びとに目を向け、心を寄せて、「なぜ続けるのか」を考える民俗学的な理解の前提となるはずです。

加えて、以前から抱いていた1つの疑問―民俗学はいかに世のため人のために貢献しうるのか―に思いを巡らせる機会を得たと感じています。この問いに対する1つの答えは、時に伝承者、時に調査者として身を置きつつ、地域の人びとの伝承への思いを共有し、次の代へと繋いでゆくことです。

残り3年間、寒中みそぎの場で問い続けることが、地域社会にも調査研究にも資する、私なりの民俗学の実践だと考えています。

解説案内スタッフレポート

おすすめスポット－展望テラス

小 林 真里恵
事業部　教育・広報課　解説案内スタッフ

当館の総合展示室の２階には窓があります。この窓のあるスペースを見晴らしがいいことから「展望テラス」と呼んでいます。

日光の強い光･温湿度の急激な変化･害虫の侵入によって展示されている資料が傷んでしまうため、展示室に窓があることは珍しいのですが、半個室のような造りにすることで光の拡散を防ぎ、窓を開閉できないように固定することで外気や害虫の流入を防いでいます（写真撮影時のフラッシュや飲食を禁止しているのも、強い光が当たるのを防ぎ、飲食物の残滓が害虫を呼び寄せてしまうことを防ぐという資料保護の理由からです）。

展望テラスは総合展示室の第３テーマと第４・５テーマの間に位置しており、終盤を観覧する前に、設置されているソファで足を休めるのがおすすめです。当館の総合展示室は１階と２階を合わせると約3,000㎡あり、学校などにある25ｍプール10個分ほどの広さなので、途中で小休止をして最後まで観覧を楽しんでいただけたらと思います。

また、季節によって景色に変化があることもおすすめポイントのひとつです。春は桜の木がアクセントになり、夏は濃い緑が一面に広がります。雪が積もる時期には、野生動物の足跡を見つけることもあります。この号が発行される頃はどんな景色でしょうか。

ご来館の際はぜひ展望テラスにお立ち寄りください。

展望テラス入口

夏の景色

ウサギの足跡

トピックス

総合展示第４テーマ、一部改修しました

尾 曲 香 織
北海道研究センター（人文系）　学芸主査

39号、40号に引き続き、文化庁の補助事業によってリニューアルした展示のご紹介です。今回ご紹介するのは、近現代から今日に至るまでを取り上げた総合展示第４テーマの改修内容です。10年前に北海道博物館へとリニューアルした際に作られた本展示では、戦争や産業構造の変化、モータリゼーションの進展、家電製品の登場などによるくらしの変化のありようを伝えてきました。今回の改修では、よりそれぞれの時代を生きた人のくらしぶりが分かるように、兵士用の奉公袋や千人針といった身の回り品、統制下で参照された布の節約方法について紹介した婦人雑誌、樺太からの引揚者が持ち帰った品々などを新たに加えました。また、展示ケースを一つ製作し、お風呂やタイル、コロナ禍に頒布（はんぷ）されたマスクといった、公衆衛生にかかわる資料を展示しました。あわせて大型の資料として、小樽市信香（のぶか）町にあり2021年まで営業していた、北海道最古ともいわれる銭湯「小町湯（こまちゆ）」の番台も新たに加わりました。現役の頃の小町湯では、男湯と女湯の間に番台があり、そこに座る番頭さんが受付していました。その雰囲気を少しでも伝えられるよう、番台を置いた木の台にわざとお客さんの足がぶつかった跡をつけたり、男女を仕切る戸をかつて使われていたものと同じように再現したりと工夫していますので、ぜひ展示室で確認してみてください。

新しく加わった衛生関係資料

小樽市にあった銭湯「小町湯」の番台

アイヌ民族文化研究センターだより

講演会「アイヌ民族を撮影した最古級の映像とその被写体」実施報告

大坂　拓
アイヌ民族文化研究センター　学芸主査

2025年５月24日（土）、フランス・パリ日本文化会館において、アイヌ民族が写された映像を主題とする講演会を実施しました。

まず取り上げたのは、フランスのリュミエール社が雇用した映画技師フランソワ＝コンスタン・ジレルが1897年に撮影した、Les Aïnus à Yéso, I・II『蝦夷のアイヌⅠ・Ⅱ』という２本の映像です。この作品はアイヌの姿を収めた最古の映像として広く知られてきましたが、撮影地点についてはいくつかの説が並立する状況にありました。

続いて紹介したのは、1912年に同じくフランスのパテ社が公開したUn peuple qui disparaît – Les Aînos『滅びゆく民族―アイヌ』という映像です。この作品も撮影地点などの詳しい情報は伴っていませんが、今回、人物の背後に写る風景から現在の室蘭市絵鞆（えとも）で撮影されたものと特定できること、主役となった男性は当時の同地区の有力者、押杵（おしきね）帯九郎であることを明らかにしました。そのうえで、一枚の写真の中に押杵と『蝦夷のアイヌ』に写る男性らが並んだ写真が残されていることなどから、『蝦夷のアイヌ』もまた、絵鞆で撮影された可能性が極めて高いことを指摘しました。

押杵は1880年代には集落の総代人を務め、その後、集落の子供たちのために学校を誘致し、自身の所有する家屋を仮校舎として提供した人物として知られています。講演会の最後は、「滅びゆく民族」という誤った認識のもとで記録された映像ではあるものの、そこに写っているのは苛酷な社会状況のなかで子孫のために未来を切り開こうと葛藤していたアイヌの姿であることを述べて締めくくりました。

今回の講演会は、パリ日本文化会館が４月29日～７月31日にかけて実施した「アイヌ文化特集」の一環として企画されたものです。100年以上前にフランス人が残した映像をパリで紹介するという素晴らしい機会を与えてくださった同館のスタッフの皆様、また、会場およびオンラインでご覧いただき、熱心な質疑と素晴らしい感想を伝えてくださった全ての方々に、あらためて心よりお礼申し上げます。

なお、当日の模様はパリ日本文化会館のYouTubeチャンネルで公開されています。著作権の都合により映像部分はカットされていますが、関心をお持ちのかたは下記QRコードからご覧くだされば幸いです。

講演会映像へのリンク

写真１　会場に向かう道から望んだセーヌ川（筆者撮影）

写真２　押杵帯九郎の肖像を用いた絵はがき（筆者蔵）

活動ダイアリー

2025年６月～2025年８月の記録

凡例
※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。
※所属の記載が無い者は当館職員です。

６月７日（土）
■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう①ヒツジの毛を洗ってみよう！（同日２回開催）」を開催。担当：谷口生貴斗・会田理人**【写真１】**
■はっけんイベント「アイヌ文様の卓上カレンダーを作る」を開催（７月 27 日までの土・日・祝）。

６月 13 日（金）
■総合展示室　クローズアップ展示１～２を展示入替（①は８月７日（木）、②は 10 月９日（木）まで）。
①刀―新収蔵資料の紹介―
②北海道へ移住した武士が伝えた古文書

６月 14 日（土）
■アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～（全４回）③」を開催。担当：吉川佳見

６月 15 日（日）
■特別イベント「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう！（同日２回開催）」を開催。担当：圓谷昂史・久保見幸・成田敦史、北海道化石会会員
■第４回蔵出し展「アイヌの衣服－北海道博物館の所蔵資料から－」終了。

６月 18 日（水）
■館内定例研究報告会を開催。発表者：柴野初音・石井祐実・波田尚大

６月 21 日（土）
■休憩ラウンジ　道民参加型展示「北海道のアンモナイト」開催（2026 年３月 31 日（火）まで）。
■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ（全 12 回）④」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑

６月 28 日（土）
■自然観察会「ミクロな生き物を観察しよう！」を開催。担当：表渓太・水島未記・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ
■アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～（全４回）④」を開催。担当：吉川佳見

７月 12 日（土）
■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ（全 12 回）⑤」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑

７月 19 日（土）
■第 11 回特別展「新選組永倉新八と会津藩士栗田鉄馬―二人のサムライが歩んだ幕末・近代―」開催（９月 15 日（月・祝）まで）。

７月 21 日（月・祝）
■屋上スカイビュー特別開放を開催。
■第 11 回特別展関連ミュージアムトークを開催。担当：三浦泰之

７月 30 日（水）
■館内定例研究報告会を開催。発表者：水島未記・成田敦史

７月 31 日（木）
■教員のための博物館の日 in 札幌を開催。

８月２日（土）
■子どもワークショップ「ガリ版でいんさつやさん！」を開催。担当：会田理人・谷口生貴斗
■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ（全 12 回）⑥」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑
■はっけんイベント「新選組ミニ巾着を作ろう！」を開催（９月 28 日までの土・日・祝）。

８月３日（日）
■講演会「新選組永倉新八とその時代」を開催。講師：木村幸比古氏（霊山歴史館学術アドバイザー）**【写真２】**

８月８日（金）
■総合展示室　クローズアップ展示⓪～①、③～⑦を展示入替（①は 10 月９日（木）、その他は 12 月 17 日（水）まで）。
⓪キレイ！不思議！さまざまなカエデの化石
①描かれたアイヌ民族のサケ漁
―小玉貞晨筆『蝦夷国魚場風俗図巻』―
③ウピシテクル（和名押杵帯九郎）の肖像
④山田秀三とアイヌ語地名を歩く―小樽―
⑤職人の道具と技術―提灯職人―
⑥人びとに親しまれてきた相撲
⑦北海道のイタチの仲間たち

８月９日（土）
■子どもワークショップ「土偶をつくろう」を開催。担当：鈴木琢也・柴野初音**【写真３】**

８月 11 日（月・祝）
■屋上スカイビュー特別開放を開催。
■第 11 回特別展関連ミュージアムトークを開催。担当：三浦泰之

８月 16 日（土）
■自然観察会「トノサマバッタをさがそう♪」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表渓太、自然ふれあい交流館スタッフ

８月 19 日（火）
■博物館実習生の受け入れ（８月 29 日（金）まで）**【写真４】**

８月 23 日（土）
■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ（全 12 回）⑦」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑

８月 24 日（日）
■特別イベント（ドキュメンタリー上映とトーク）「ひ孫が作ったドキュメンタリー上映＆新発見！『川口家文書』に見える明治期の永倉新八の動静」を開催。共催：よみうりカルチャー、講師：杉村和紀氏（TV ディレクター／永倉新八ひ孫）・朝山大吾氏（よみうりカルチャー）・中村武生氏（京都女子大学非常勤講師）

８月 27 日（水）
■館内定例研究報告会を開催。発表者：高橋佳久・亀丸由紀子

８月 31 日（日）
■講演会「剣客・鉄馬、絵筆をふるう」を開催。講師：五十嵐聡美氏（美術史家）

写真１

写真２

写真３

写真４

来館者数

○2025年６月～８月
総合展示室　22,615人　特別展示室　9,305人　はっけん広場　3,313人
○累計（2015年４月～2025年８月）
総合展示室　925,171人　特別展示室　631,382人　はっけん広場　140,362人

森のちゃれんがニュース　第41号

発行日：2025年9月25日
編集・発行：北海道博物館
〒004-0006　札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
ウェブサイト https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp
©Hokkaido Museum, 2025